

近世鹿児島における磁器生産
一川内市平佐焼窯跡群の調査成果を中心に一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2961

近世鹿児島における磁器生産

- 川内市平佐焼窯跡群の調査成果を中心に -

渡辺芳郎(鹿児島大学法文学部)

近世鹿児島における磁器生産は、17世紀中頃、加治木町山元窯(関編 1995)、始良町元立院窯(下鶴編 1995)で試みられるが、本格的な生産が始まるのは、肥後天草の陶石が流通するようになる18世紀後半からである。以後、19世紀にかけて、島津領内で複数の磁器窯が操業されるが、その中でも川内市天辰に所在する平佐焼窯場は、その生産量がもっとも多く、また領内磁器窯の技術的中心であった。平佐磁器は、藩内とともに、沖縄など南西諸島にも流通していた(渡辺 2003)。

筆者ら、鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室では、1999年以来、川内市教育委員会文化課のご協力を得て、平佐焼窯跡群の分布・測量調査を実施してきたが(渡辺 2000)、2003年末から2004年初にかけて、西田記念東洋陶磁史研究助成基金の助成を受け、平佐焼の中心的窯であった大窯窯跡の発掘調査を実施した。

大窯は、これまでの分布・測量調査により、胴木間(燃烧室)+12室の焼成室よりなる扇形連房式登窯(渡辺 2004参照)であることが確認されていたが、今回、窯体部については、胴木間と窯尻にトレンチを設定することで、その正確な規模を確定し、11・12号焼成室にトレンチを設定することで、焼成室の規模と構造を把握することを目的とした。また窯体西方に物原が残るが、そのうち北物原東北部にトレンチを設定し、製品・窯道具などの層位的把握を試みた。

その結果、窯体は、焚口から窯尻まで、全長約46.3mを測ることがわかり、近世薩摩焼の窯としては、現在のところ最大規模であることが改めて確認された。また胴木間奥壁はトンバイと粘土を交互に積む方法で構築されており、同様の構築法は11号室奥壁でも見られた。使用されたトンバイには「平」印の刻印が押されており、トンバイが平佐専用生産されたと推測され、注目される。

11号室は、温座の巢(狭間)・火床・火床境・

砂床が検出され、焼成室の構造がほぼ把握できた。11号室は、東西幅7.37m、南北長4.00~4.22mを測る。12号焼成室は、東西方向のトレンチを設定するに留め、東西幅のみ7.02mであることが判明した。扇形連房式登窯ではあるが、最奥室(12号室)の幅は11号室よりやや狭い。

窯尻トレンチでは、窯尻基部が検出され、4条の通煙道が確認された。また窯尻後方には、地山整形により掘削された溝が検出された。溝が窯尻後方から窯体両側部に伸びることは、地表面より観察できる。

物原トレンチは、東西1.8m、幅1.0mという小規模なものであるが、計14層の層位が確認できた。それらは、(1)物原中央部から物原末端へ傾斜する層位、(2)攪乱層、(3)物原末端から物原中央部へ傾斜する層位の3種類に大きく区別できる。(1)(2)の層は、流れ込みなどが考えられるが、(3)の層は、焼成時に廃棄されたプライマリーな様相を留めている可能性が高い。(3)層から出土遺物は、19世紀第1四半期に操業した始良町重富皿山窯跡出土資料(深野 2004)と類似し、また(1)(2)層出土遺物は、19世紀第2・3四半期の平佐焼新窯窯跡出土資料(前・小原 2000)と類似することから、19世紀の大窯製品を、おおまか2時期に細分できる可能性が、今のところ想定できる。

物原出土の窯道具では、「センベイ」と呼ばれる円盤形の窯道具がもっとも多い。その直径は、上に載せた製品の大きさと相関すると考えられ、出土資料1714点(物原トレンチ南拡張区10~14層)について直径を測ったところ、5~7cm台のセンベイが全体の8割を占めた。この大きさのセンベイは、上に碗や小皿を置いたと推測され、碗・小皿類が、大窯の製品の主体であったと考えられる。

また直径15cmを超える大型センベイには、中央部に突起が作られているものが見られる。突起先端に釉薬が付着していたことから、突起の機能は、肥前地方のハリ支え技法と同様、大皿底部の変形を防ぐ目的であると推測される。この技法はこれまで鹿児島県内では確認されていなかった技法である。今後、消費地遺跡出土資料の検討を進める必要がある。

なお物原トレンチは、地表下0.9m(東端)~1.4m(西端)まで掘り下げたが、地山は検出できなかった。物原が視認される高さより厚い堆積を持つことが確認された。

以上、今回の発掘調査により、近世鹿児島における磁器生産について、その技術・編年を考える上で、いくつかの手がかりが得られ

た。今後、その歴史的な位置づけを試みることに課題である。

引用参考文献

下鶴弘編 1995 『元立院窯跡』 始良町教育委員会

前幸男・小原浩 2000 「平佐新窯 - 天辰地区埋蔵文化財発掘調査事業(皿山第一地区)概要 - 」 『用と美 平佐焼の世界展』 図録 川内市歴史資料館 pp.53-59

関一之編 1995 『山元古窯跡』 加治木町教育委員会

深野信之 2004 「重富皿山窯跡推定地」 『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』 始良町教育委員会 pp.94-103

渡辺芳郎 2000 「川内市平佐焼窯跡群について - 1999年の分布・測量調査の成果を中心に - 」 『用と美 平佐焼の世界展』 図録・川内市歴史資料館 pp.44-52

渡辺芳郎 2003 「近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流」 『鹿児島大学法文学部人文学科論集』 第57号 pp.89-106

渡辺芳郎 2004 「近世薩摩焼の窯構造」 『金沢大学考古学研究室紀要』 27号 pp.39-49